

老健施設「アルボース」の 医師として



美原恵里 [みはら・えり]

介護老人保健施設アルボース(群馬県)
施設長

過日、久しぶりに演奏会に出かけた。オーケストラの指揮者は82歳になる。人間性が現れていて心を揺さぶられる素晴らしい演奏だった。昔、駆け出しのころに受けた研修で「施設長は、いわばオーケストラの指揮者だ」と聞いた。なるほど、このように聴く者の心を感動させ、そして楽団員を慈しみ統率していく82歳の指揮者に比べて、私はどれだけのことをやってきたのだろうか。そしてこれから先、何ができるのか。

世の中が早い速度で変化している。社会が「液化化」している。いままでの成功体験は役に立たない。AIによる産業革命といわれる。大きな不安に飲み込まれそうになるなか、「冷静に見極めよ」と己に言い聞かせつつ、職員、ご利用者、そして地域の人々を守るためにも生き残りをかけて舵をとる。

アルボースが果たしてきた役割

1996年の開設から施設長として運営に携わり、はたと気づけば27年も経過していた。

その間、社会情勢は変化し続け、人口減少・人口構造の変化も進み、医療行政は次々と新手の対策を打ってきた。最近では、新型コロナパンデミック、ウクライナ戦争など思いがけないことが起こった。我々の日常も大きくその影響を受けた。

開設当初にさかのぼると、併設病院が脳疾患の専門病院であり、急性期を過ぎても機能障害が残り家に帰れない患者さんが多く、「社会的入院」が問題であった。当時は回復期リハビリ病棟も存在しなかった。そこで、なんとか家に帰れるようにと老健施設をつくり、当初から在宅復帰に力を入れた。急性期から在宅まで、川上から川下へ流れるように機能してきた。当施設は、“自宅に準じるとみなされた施設”ではなく、本来の自宅に帰ることにこだわった。それは

ご利用者の願いでもあった。

医療についての治療方針は、ご利用者の生活や想いを大切にしつつ、QOL・QODを優先した話し合いを重ねてきた。「支える医療」により、なじみの環境で本人への負担が少ない形で、どうしても必要なケースを除いては施設内で対応してきた。その結果、認知症進行のリスクや廃用症候群のリスクは少なく、ご利用者もご家族も、老健施設で提供できる医療で十分に納得された。同時に、医療・看護やリハビリの視点をもった有能な介護職が育った。

アルボースがめざしてきた人材

「第二特養」という言葉が使われた時期があったが、当施設は一貫してケアの質の確保を大前提としつつ、「介護老人保健施設の理念と役割」に基づいた運営を進めてきた。しかし、高機能・高品質を維持するためには、それなりの体制が必要である。現場業務に取り組む職員に対して教育・研修・学術的活動の推進にも力を入れることで、職員は仕事のやりがいはあるが業務量が非常に多くなるため、当然手厚い人員配置が必要であった。人は頭数がそろえばこと足りるものでもなく、すぐに補充できるものでもない。人材育成には時間がかかる。以前から人手不足を見越して人手を厚くしてきた。

職員が学ぶにも、地域貢献するにも、一定の余裕がなければなし得ないと考えた。職員の志と経営努力により、採算はなんとか確保されているものの、人件費の伸びは顕著であった。しかし「最後は実際の中身が勝負だ」と信じて、今日までやってきた。国が描くあるべき方向に針路を定め、抑制廃止・認知症ケア・個別ケア・リハビリ・多職種協働・口腔ケア・支える医療・ACP・SDGs・BCP・地域連携・そ